2025年01月15日 中日新聞 朝刊 10頁

文化芸大・芝居同好会　来月インドネシア初ツアー

日本昔話で文化交流

「インドネシアでも観客を巻き込みたい」と話す（左から）庄司さん、河原崎さん、幸田さん＝静岡文化芸大で

せりふと動きだけ「柔軟に演技」

静岡文化芸術大（浜松市中央区中央）の同好会「出張お芝居！ぷちまり」が2月、インドネシアで初めてツアー公演をする。インドネシア語で日本の昔話「浦島太郎」や「三枚のお札」など7演目を披露する。企画した4年幸田穂奈美さん(22)は「演劇なら体や表情の動きで言語を超えた交流ができる。観客を巻き込んで盛り上げたい」と話す。（高島碧）

公演は2月13日から12日間で、インドネシアの大学や公共施設の計14カ所で子どもから障害のある人、大人まで幅広い世代に演じる。メンバーはぷちまりの幸田さん、4年庄司琳絵（りえ）さん(22)、同河原崎茜さん(22)のほか静岡文化芸術大のインドネシア留学生ら6人。

ぷちまりは2013年に結成し、小道具を使わずに黒い服を着てせりふと動きだけで演じるのが特徴だ。観客に声をかけ、会場も一体となる作品が多い。浜松市内の催しや子ども食堂、障害者施設などで週1回公演している。

2023年から市内のインドネシア・フェスティバルに出演し、市内で暮らすインドネシア人との交流が始まった。日本語で桃太郎を演じると、桃太郎が鬼を倒す場面で「頑張れ」といった声援が出るほど盛り上がった。河原崎さんは「勧善懲悪の分かりやすい物語に観客が引き込まれていた」と振り返る。出演で得たつながりから昨秋にツアーが決まった。

庄司さんは「インドネシア語は発音を少し間違えるだけで意味が変わる。せりふを覚えることが、文化の理解になっている」と話す。幸田さんは「一畳分の広さで演技できるのが私たちの強み。インドネシアでも柔軟に演じたい」と話す。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています